

内御堂遺跡

—中世武家屋敷跡を中心とした—

埋蔵文化財発掘調査報告書

1980.12

長野県飯田市教育委員会

内御堂遺跡

—中世武家屋敷跡を中心とした—

埋蔵文化財発掘調査報告書

1980.12

長野県飯田市教育委員会

序

農業近代化をはかるため、地区再編農業構造改善事業として、飯田市下久堅北部地区北坪工区が実施されることになりました。

かねてより、この地帯は知久氏の古城と、徳川の代官 菅沼小大膳定利の居城として知られる知久平城跡の東側に位置し、地名に大膳町が残っているほどの地域なので、事業主管課である農林課と事前協議をし、工事に先立ち遺跡発掘調査を行うこととした。

調査団長に佐藤魁信先生をお願いし、10月2日から11月7日までの間 約1ヶ月を費して行われたが、中世の武家屋敷跡と考えられる貴重な遺構や資料が検出され、成果ある調査となった。

この調査にあたって、佐藤先生には終始熱意をもって当られ、また農林課担当者及び地権者の理解と協力によって、ここに完了したことに対し深く敬意を表します。

昭和55年12月

飯田市教育委員会

例　　言

1. 本書は昭和55年度飯田市下久堅北部地区地区再編農業構造改善事業による知久平北坪集団農区総合整備事業に伴う 内御堂遺跡東端部の発掘調査報告書である。
2. 本書の編集・執筆は佐藤が担当した。
3. 写真は佐藤が、遺構実測図作成は佐藤・牧内が、遺物の作図は佐藤が、遺構・遺物の製図は田口が分担した。
4. 遺構実測図のうちピット内または横に記した数字は床面からの深さをcmで、遺物出土状況は床面からの高さをcmであらわし、縮尺は罔示してある。
5. 出土遺物は飯田市考古資料館に保管してある。

目　　次

序	1
例　　言	2
目　　次	2
I 環　　境	3
II 発掘調査経過	9
III 調査結果	11
1. 住　居　址	12
2. 土　　坑	14
3. 屋　敷　跡	14
VI ま　と　め	18
調査組織	19
図　　版	20
1. 遺　跡	
2. 遺　構　・　遺　物	
3. 発　掘　ス　ナ　ッ　プ	

I 環 境

内御室遺跡は長野県飯田市下久堅知久平に所在し、下久堅小学校北側から東側の段丘面にあり、今次発掘調査地域は東側の丁415番地を中心とした遺跡の北東端部である。

飯田地方は東に赤石山脈が連なり、西に木曾山脈が聳え、その中間を天竜川が南流してその両側に見事な段丘が発達している。天竜川の東岸一竜東地区は背後に赤石山脈の前面に中山性の伊那山脈が、鬼面山(1,889m)、氏乗山(1,818m)、金森山(1,702m)となって赤石山脈と並走している。伊那山脈の東面は急峻な断崖をなすが、西面は数列の断層をもちらながら段丘面に達し、天竜川西岸一竜西地区に比し、山麓からのびる扇状地は狭小で段丘面の幅員も全般的に狭いが豊丘村から嵩木村にかけての段丘の発達は著しく、特に北から田村原・林原・伴野原・帰牛原・伊久間原と続く伊那谷中位段丘面の幅は広く、典型的な段丘地形を形成している。下久堅に入ると中尾・庚申原と規模は小さくなるが伊久間原から続く段丘面が続くが、それ以南は富田沢・深沢・宮の沢・塩沢・知久沢。いたちが沢などの本支流によって浸蝕され、段丘面は細かく分断されており、小段丘を形成しているが多くは段丘とは気づかれない程の狭い傾斜地形を形成している。

遺跡のある知久平面は下久堅では最も広い平坦をもつ地域である。標高437~440m、南北400m、東西350~500mの段丘面で、北は塩沢、南は知久沢による高差35~40mの深い侵蝕谷によって切られ、西は高差約35mの段丘崖で下位段丘面となり、さらに20mの高差をもって天竜川氾濫原となる。天竜川との比高差60mを測る。東は傾斜地形となって上り、上位段丘の大原段丘(550m)から南に上虎岩・牧の内・角領と連なる段丘面は天竜川の小支流の侵蝕によって分断され、谷と尾根が交互に打続いているとみる地形となっており、さらに伊那層よりなる丘陵が東に高まって続き、その丘陵の東に断層谷により形成された集落嵩木村富田・飯田市上久堅がある。

知久平段丘面の南側を国道152号が通り、その両側に飯田市下久堅支所・公民館・小学校・農協・郵便局があり、地区の中心地となっている。

遺跡は台地の北側にあって知久平城跡を含む南北50~150m、東西300mの範囲にあり、微地形をみると西に知久平城跡があり、その東に塩沢の谷頭侵蝕が南に台地を切って進んでおり、遺跡を二分する地形をなしているが、その侵蝕は近年になって谷を深めたものといわれ、同一遺跡であったものである。かつては南は諏訪神社南・下久堅公民館から東にかけて遺跡をとりまく状態に湿地帯であったとみる。公民館建設時の基礎工事にみられた深い泥と粘土の堆積、今次調査の遺構検出個所より煙か離れて南から東にかけてはローム層ではなく、泥と粘土の堆積層となることが認められた。台地の北縁部から20~40m南に入った地点を東西にはば直線に幅2m余の砂層が続き、さらに北西端部は砂礫の広範囲におよぶ堆積層となっており、古墳時代の住居址の一部を埋めている。かって塩沢川の氾濫路を示すものとみられた。遺跡は湿地帯を避けた北西端部に立地している。

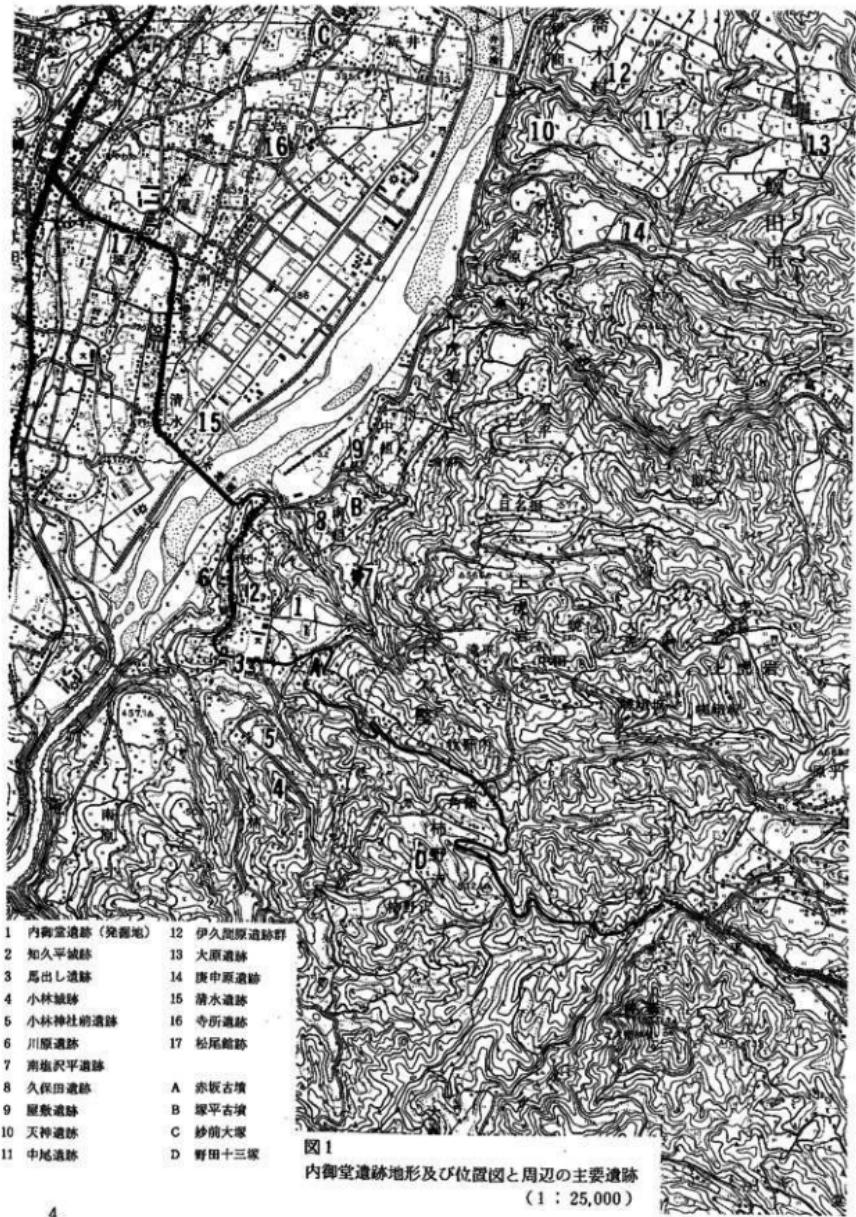


図1
内御堂遺跡地形及び位置図と周辺の主要遺跡
(1 : 25,000)

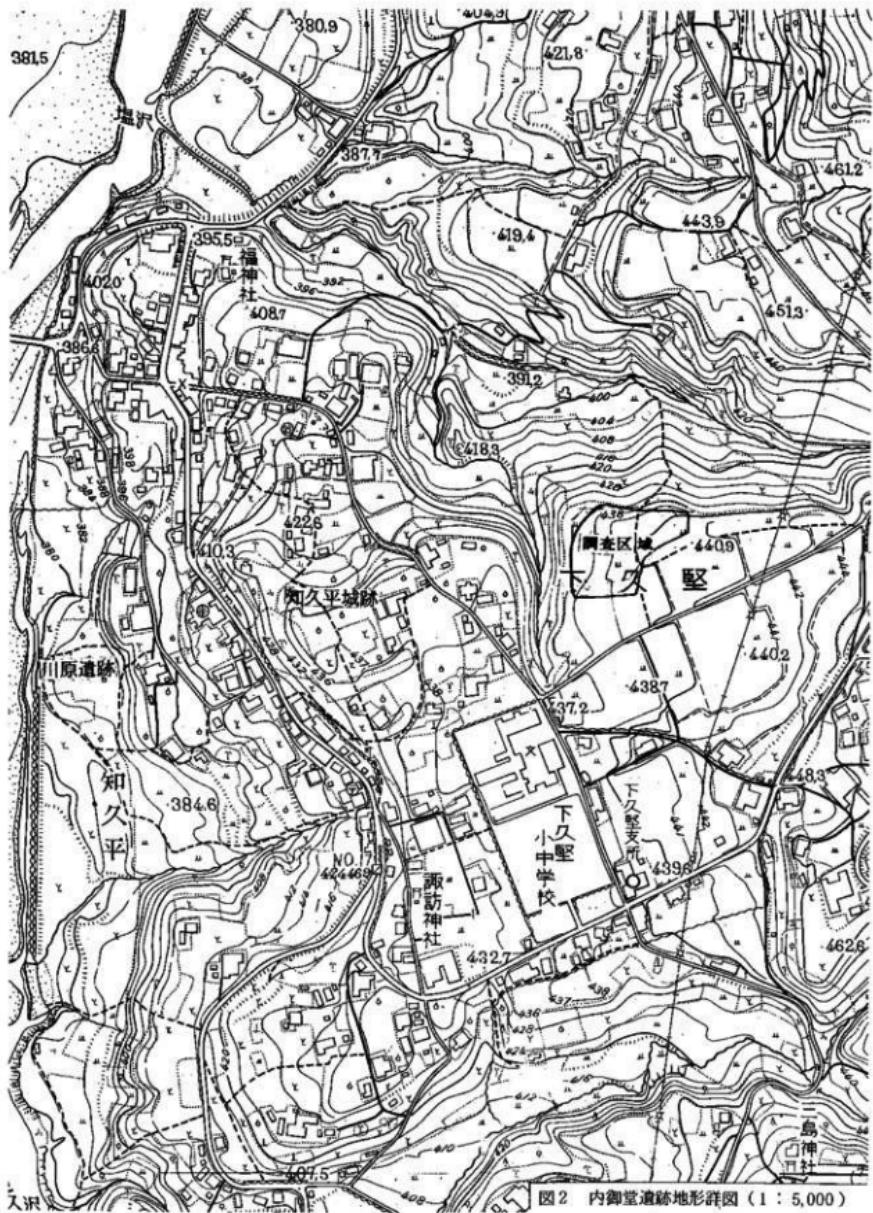


図2 内御堂遺跡地形詳図 (1 : 5,000)

歴史的環境をみると、内御堂遺跡の大半を占めているのが知久平城跡である。丘陵と平地を利用した平山城であり、北西端部に本丸。その南と東に4条の屈曲する空堀を順次めぐらし、二の丸、三の丸を構築し、三の丸に続く惣曲輪には更に3条の堀が穿かれており、南の知久沢の段丘崖となる。北には出丸とみる城の神と呼ばれる突出部があり、規模の大きな城跡である。現在城跡は宅地・果樹園・水田等となり、そのため堀は埋められ翠壁は破壊された面は多くみられるが城跡の構造を知ることができる。

知久平城構築の過程の概略をたどると、平安時代後半竜東地域一伴野庄は上西郡領頭であり、鎌倉時代のはじめ諫訪氏の同族神氏は現上伊那郡箕輪町から知久平に移り、知久氏を名のり、自ら頼朝の御家人となり伴野庄の地頭となって実権を握るようになった。知久氏の領有する知久郡は北は小渋川から南は万古川までの竜東一円の地であり、さらに座光寺・上郷の一部にまでいたっている。知久氏は文永年間（1,270頃）に文永寺を建立し、現在重要文化財となっている五輪塔を造っている。五輪塔石室天井裏の銘文には弘安六年癸未十二月二十九日 神教幸造

南都石工首原行長 左衛門尉神教幸 生年六二歳

とあり、1,283年奈良より石工を招き五輪塔を建造している。また諫訪神社の上社に普賢堂・五重塔を建立し、銅鐘を鋳造している。

知久氏の本拠は上久堅柏原の神ノ峰城とされているが、それは戦国動乱期に入ってから神ノ峰に山城を築き、そこに移ってからである。それ以前の本拠は知久平に館を構えたとみられる。天文19年（1,550）の「諫訪上社神使御頭之日記」には、

「知久本郷・知久柏原・知久虎岩 是ハ知久殿被押候……」とあって伊那郡では三郷をあげている。柏原は神ノ峰城のある地、虎岩は知久平の北にあり、知久平は知久本郷となっていたり、知久氏の館を構えた地であったことを示すものである。館の所在は知久平城本丸の位置と推定されている。東西・南北90m余の平坦な所であり北と西は急な段丘崖となり、東から南にかけては湿地帯であり、防備の面と天童川を隔てた伊賀良庄の本拠に対する位置にもある。

武田信玄は天文23年（1,554）文永寺・安養寺を焼き神ノ峰を攻め、伊那は武田の支配下となり、知久氏は一時滅ぶ。天正10年（1,582）武田氏滅亡、織田信長の支配となり毛利秀頼飯田城主となるが、まもなく信長本能寺に倒れ、徳川家康の支配地となり、郡司菅沼小大膳を置く。知久氏は本領安堵されて神ノ峰城に帰る。天正11年（1,583）菅沼氏は知久平城の築城にかかり、翌12年知久氏を三河で自害させ、神ノ峰城は廢城となる。

天正18年（1,590）豊臣秀吉と徳川家康との和議があり、家康は関東に移り、伊那は秀吉の支配地となり、菅沼氏は上州吉井へ所替となる。毛利秀頼が再び飯田城主となり、その後京極高知が後を繼ぐ。関ヶ原戦後慶長6年（1,601）伊那は徳川氏の支配地となり、小笠原氏が飯田城主となり、知久氏は3千石の旗本となり阿島に館を構え、幕末にいたっている。

菅沼氏の伊那支配は7年間であり、この間秀吉と家康の対立ははげしい時期であり、知久平城の築城は完成をみずかに飯田に移されているが、その規模は大きく、中世終末期の城郭を示すものとしては重要である。

内御堂周辺の遺跡をみると、知久平台地の南縁部に馬出し遺跡があり、これから西の縁部にかけて平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器片が多く採集されている。知久沢を隔てた南の小林神社前遺跡には古墳時代後期の住居址5と中世住居址1が畠縫事業による灌水工事に伴う立合調査で発見されており、その一段高い丘陵には知久氏の支城小林城跡がある。さらに南の南原には知久氏建立の文永寺があり、重文の五輪塔がある。東南東の丘陵の東の断層谷に孤立する神ノ峰は知久氏が後に本拠を構えた神ノ峰城跡である。

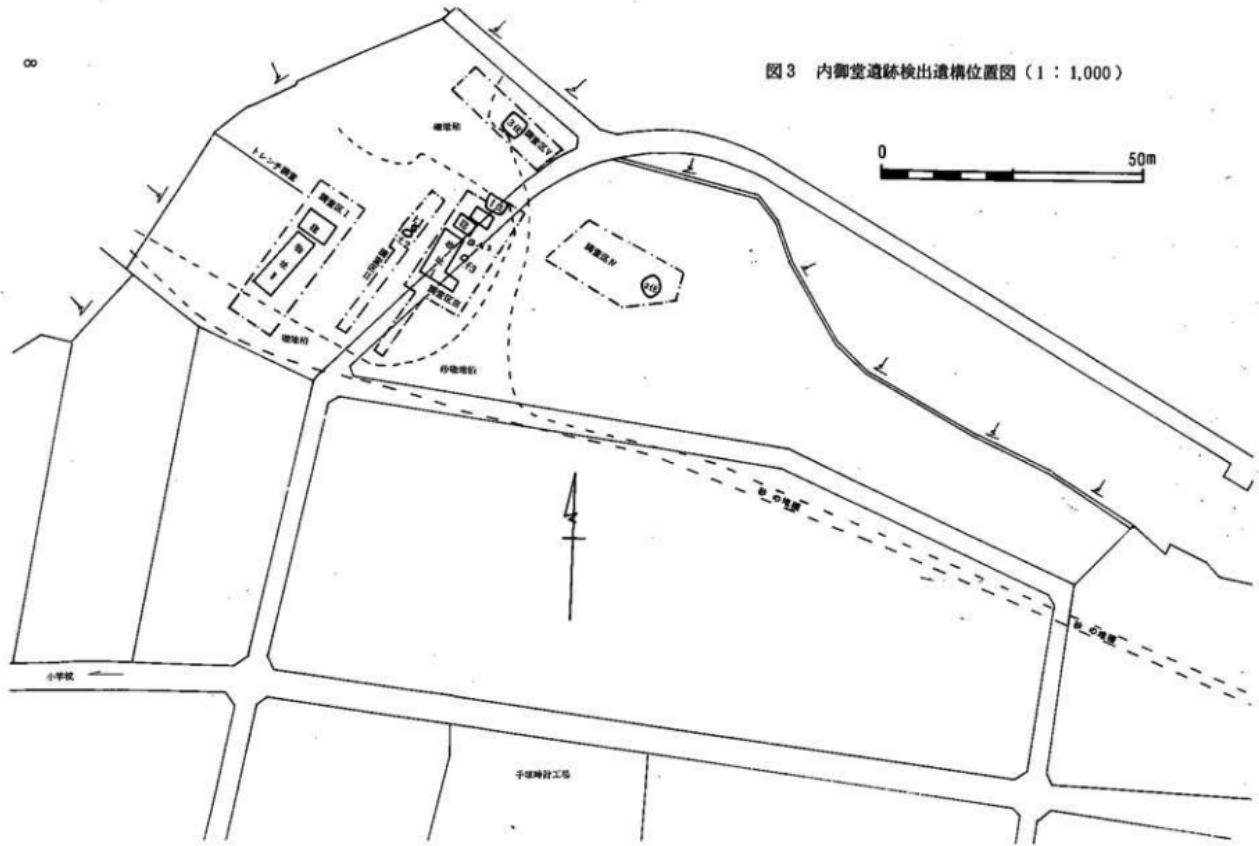
遺跡のすぐ北の塩沢を隔てて南塩沢平・久保田・屋敷と北に続く遺跡は平安時代の遺物の表探が多くみられ、屋敷遺跡では縄文中期・弥生後期の遺物もみられている。それから北に続く小段丘面では縄文期の石器が表探されており、中尾・天神遺跡では54年発探調査で縄文早・中・後晩期の住居址が発見されている。その隣にある伊久間原遺跡は縄文・弥生・古墳時代から平安期に至る飯田地方の主要遺跡として注目され、上位段丘の大原遺跡は52年度調査で有舌ポイントの出土をみ、縄文中期中葉の住居址が発見されている。

天竜川氾濫原から沖積段丘面の遺跡には、遺跡西の段丘崖下の氾濫原に川原遺跡があり、縄文後晩期・弥生中期の遺構の存在が確かめられており、天竜川対岸の清水遺跡は新水神橋建設時の調査で弥生時代後期・古墳時代前期にかけての住居址、方形周溝墓、平安時代から中世の住居址等が検出され、出土遺物も多く注目される遺跡である。それより北にある寺所遺跡は弥生中期初頭寺所式土器の標準遺跡がある。その北にある妙前大塚は眉庇付窓の出土をみた古墳である。松尾の城は中世前半期松尾館のあった地といわれている。

遺跡周辺の古墳にはすぐ東の一級高位の小台地に赤坂古墳があったが消滅している。西の段丘崖下の台地に高塚・島垣外古墳があったが消滅しており、塩沢の対岸の台地には塚平古墳があり、封土は失っているが石室を残している。中組には4基の古墳があったがいずれも消滅してしまっている。

・遺跡の南東の丘陵地帯に野田十三塚がある。昭和44年農協稚蚕桑園を造成する際削りとられ、現在僅に残っているにすぎない。調査結果、人工的であること、墓でないことははっきりしたが、中世の民俗信仰によるものか、その性格は把握されなかった。

図3 内御堂遺跡検出遺構位置図（1：1,000）



II 発掘調査経過

昭和55年度飯田市下久堅北部地区再編農業構造改善事業は知久平北坪集団農区総合整備事業が実施されることになった。この地域は内御室遺跡の北東端部にあり、また知久平城跡の外郭をなす地でもある。このため飯田市教育委員会が主体となって工事前調査を行ない、記録保存することになった。

発掘調査は10月2日より11月7日までの延25日間に行なわれた。10月中は雨天の日が多く作業は捗らなかった。

発掘調査日誌

10月2日（晴） 器材運搬。テント張り、最下段水田にトレント調査。泥の堆積で遺構・遺物なし。

10月3日（晴） 2段目の水田一I調査区にグリッド設定、調査。耕七下に堅い面あり、中世陶片の出土を見る。

10月4日・5日（晴） 日曜日・村祭りで休む。

10月6日（くもり） 調査区Iの水田調査。耕七下の堅い面は南側で切れる。北と東は作物があり、調査を後にまわし、3段目の水田一調査区IIにグリッド設定する。

10月7日（雨） 作業不能

10月8日晴グリッド調査。土坑1・2号を検出、掘上げる。4段目の水田一調査区IIIにグリッド設定。調査。中世陶片の出土を見る。

10月9日（晴） 前日についてグリッド調査。黒褐色砂質土の下にはロームの堅い面となる。全面に木炭がみられ、青磁・山茶碗片の出土をみ、中世遺構とみられる。

10月10日（くもり・小雨） 前日に引き続き調査。

10月11日（くもり・小雨） 中世遺構拡張調査。

10月12日（晴） 日曜日休み

10月13日（雨） 作業不能

10月14日（晴・くもり・雨となる） 中世遺構拡張調査一耕土作業。午後バックホーン（1時間）により表土排除。台風19号接近に備え、排水・テントの補強をする。

10月15日（晴） 前夜の豪雨により全面水没となり排水作業、遺構の排水……バックホーン（20分）。中世遺構南へ調査を進める。

10月16日（雨となる） 作業打切りとする。

10月17日（晴） 1号住居址を検出、調査。

10月18日（晴） 1号住居址、掘上げー北側は疊層となる。一測量。上段の田一調査区IVにグリッド設定。調査にかかる。

10月19日（雨）

10月20日（〃） 作業不能

10月21日（雨・晴）

10月22日（晴） 調査区IVグリッド水没となり排水作業、中世遺構周辺耕土作業。

10月25日（晴） 中世遺構を建物址Iとする。南に拡張、調査。

- 10月24日（雨） 建物址 I の北側、写真・測量をなす。
- 10月25日（雨） 休み
- 10月26日 日曜日休み
- 10月27日（くもり） 建物址南側の調査、整った柱列が並ぶ。柱穴中に柱の残存を検出する。
- 10月28日（晴） 建物址 I を一応掘上げる。調査区IVに2号住居址を検出する。
- 10月29日（朝雨・晴） 建物址 I の再調査。2号住居址の調査。
- 10月30日（晴） 建物址 I の測量、写真。2号住居址調査、被火災の住居址となる。
- 調査 I の未調査区の排土（バックホーン 0.5 時間）作業。
- 10月31日（終日時雨模様） 建物址 II を検査調査。2号住居址完掘、写真。北下段の梅烟伐採。
- 11月 1日（晴） 建物址 II 完掘、測量。2号住居址測量、北下段梅烟一調査区 V ブルトーザで排土。南から西側は疊の堆積。中央部に黒土の落ちこみを発見、調査を進める。土師器、須恵器片あり。
- 11月 2日 連休休み
- 11月 3日 "
- 11月 4日（晴） 3号住居址検出一周辺の排土（バックホーンによる）
- 11月 5日（くもり・晴） 3号住居址完掘、写真。建物址 I の柱残部のタチ割調査、断面図。テント、器材を撤収する。
- 11月 6日（晴） 3号住居址測量、建物址 I・II柱穴再調査測量。柱のとりはずし。
- 11月 7日（晴） 未調査部の調査、現場調査を終る。

現場調査終了後、遺物・遺構図の整理、製図をなし、報告書作成にかかる。

III 調査結果

内御堂遺跡において発掘調査した遺構は次のような。

住居址 3 ……縄文前期 1, 古墳時代後期 2,

屋敷跡 1 ……建物址 2

土坑…………… 3

調査面積 900 m²。調査区の南から東はローム層ではなく、泥と粘土の堆積となり、広範囲にわたってかつては湿地帯であったことが確認された。また調査区域の東に幅 2 m 余の砂の堆積が東から西に続き、西北端部は礫の堆積層となり、発見された遺構を埋めているのもあり、古墳時代以後、塩沢の氾濫を示すものとして注目された。

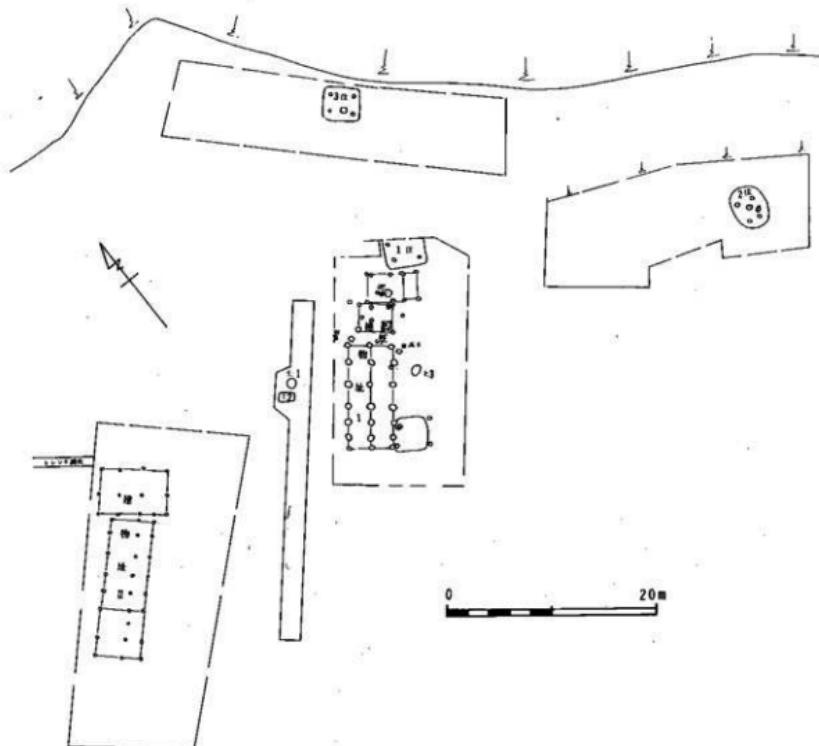


図4 内御堂遺跡遺構分布図 (1:500)

1. 住居址

1号住居址（図5）

調査区Ⅲの北端部に発見され、2分の1近くは氾濫疊層によって埋められている。東西4mの隅丸方形をなしローム層に10cm前後掘りこむ竪穴住居址である。柱穴3ヶが発見されているが、南側の2柱穴は疊が詰り浅い。カマドは北側にあったとみられるが疊の堆積のため不明であり、北側の床面は疊の混入によって荒れていた。

遺物は少なく、土器は土器器のみで図示できるのは1の高杯の脚部のみである。小破片は20点近くあり、鬼高期のものとみられる。須恵器はみられない。2の有肩肩状形石器は北側の疊の混入部より出土したもので、弥生時代の石器であり、硬砂岩製、重量172g、混入品とみられる。

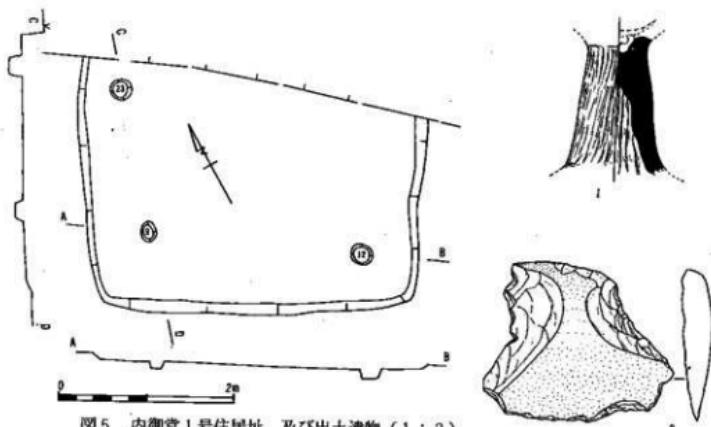


図5 内御堂1号住居址、及び出土遺物 (1:3)

2号住居址（図6）

調査区IVの東側に発見され、南北4.2m×東西3.35mの楕円形をなし、ローム層に10cm前後掘りこむ竪穴住居址である。被火災の住居址で全面に焼土がみられ、炭化木と木炭は多くみられた。床面は堅く主柱穴は4ヶ、炉址はほぼ中心部にあり円形のスリ鉢状に掘りこむ地床炉である。その東50cmに方形の深さ5cmの炉址ともみえる掘りこみがあり、これを掘る状態に石を置いてあり、2この炉址があったものとも思われる。

遺物（図7）土器はいずれも小片で出土量は比較的多いが、図示したのは1~8であり、3~5mmと薄手平底の土器である。粘質土よりの出土のため器肌はあれ、僅かに文様を知ることのできるのは3・5・6の土器片のみで平行沈線文がみられ、縄文前期の土器である。石器には9は縦形の石匙で凝灰岩製35g、10~13の石斧は小形で13が凝灰岩の他は硬砂岩製で65g~90gのものである。14の石鏃、15~16・19はスクレーパーとみられ、17・18は剥片石器でいずれも黒曜石製であり、この他黒曜石の破片の量が多い。

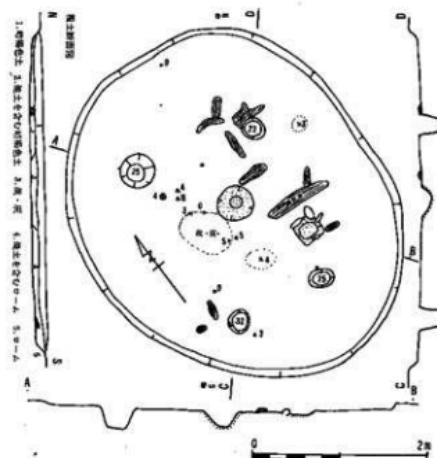


図6 内御堂 2号住居址

3号住居址（図8）

台地北端部の一段下がった梅畠一調査区Vに発見された。南側は氾濫疊の堆積で埋まり原形をとどめないとみられるが、南北3.1m×東西3.6mの隅丸方形をなし、15~20cmローム層に掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く主柱穴は4つ整った配置にある。南側の柱穴間のほぼ中央に方形の浅い炉址状の掘りこみがあり、焼土も顯著にみられヘツツイを置いたものともみられる。南壁は疊層となっており、土石流がカマドを埋め破壊したともみられる。

遺物（図版）は図示していないが、土師器と須恵器がある。いずれも小片であり、土師器は壺と杯形がみられ、国分式にみられるカ目ではなく、真間式に比定されるものとみる。須恵器は壺と杯片があり、美濃須衛窯産であり、律令期に入ってからのものである。

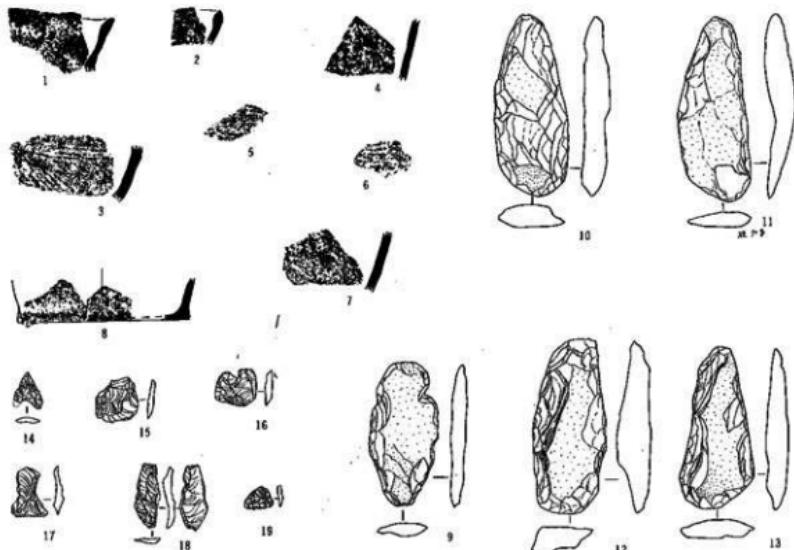


図7 内御堂 2号住居址出土遺物 (1:3)

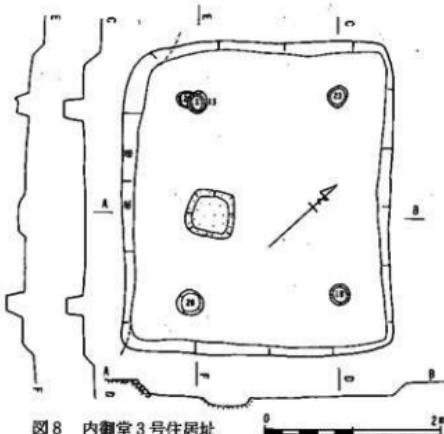


図8 内御堂3号住居址

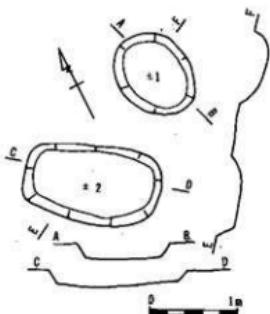


図9 内御堂土坑1号・2号

柱穴は東西3.1m、南北2.5mの柱穴間隔をもち、南東側に0.9m×0.9mの方形の上部には頗るな焼土があり、廻炉裏とみるものがある。それを支えて構築したと思われる四隅と中央部に柱穴が掘りこまれている。この周辺よりの遺物出土は多くみられた。

③は南北2.5m×東西1.8mと1.2mの柱穴間隔をもち、さらに東側に1.2m間隔をもつ出入口とみるが付く。また中心部より南に寄って65cm×60cm、深さ25cmの隅丸方形の掘りこみがあり、その内部上層に5つの石を置き、焼土が全面にみられた。炉址とも・土坑ともみられる形態をなすもので、遺物はなく、建物址に付くものか、その性格は把握できなかった。

建物址Ⅱ(図11)は、①東西2間×南北7間、②東西3間×南北2間の建物となる。柱穴はいずれも小さく径20~30cmの円形、深さ15~30cm、底部が広くなっている袋状をなすものが多く、柱穴の周囲を石詰め、

2. 土 坑

土坑は1号~3号が検出され、1号・2号は下から三段目の水田一調査区Ⅱに発見された。3号は屋敷跡・建物址Ⅰの東側に検出されている。

土坑1号(図9)は南北104cm×東西80cmの梢円形、深さ22cmローム層に掘りこむ土坑で主軸方向N9°Wを示し、出土遺物はない。

土坑2号(図9)は南北90cm×東西155cmの隅丸長方形をなし、深さ20cmローム層に掘りこみ、主軸方向N52°Wを測り、出土遺物はないが、土坑1号の南45cmにあり、その形態からみて1号・2号とも土壤とみられるもので、周辺の住居址からみて古墳時代後期から律令時代のものと推定される。

土坑3号(図10)は南北86cm東西110cm、深さ35cmローム層に掘りこむ梢円形をなす土坑で、主軸方向N55°Eを測る。出土遺物はなく、その性格は把握できなかった。

3. 屋 敷 跡 (図10・11)

屋敷跡は建物址Ⅰ・Ⅱの二つの建物によりなっている。主体となる建物址Ⅰは調査区Ⅲに、その付属とみる建物址Ⅱは一段低い調査区Ⅰに発見され、その比高差60cm、その間隔は17mある。

建物址Ⅰ(図10)は南より①2間×5間、②1間×1間、③1間×2間の連続する建物よりなっているとみられる。①の建物の柱穴は径40~50cmと規模は大きく、柱の根元を残すものにP1~P4があり、いずれもヒノキの割柱であり、P4の柱断面は長方形をなしている。柱穴には炭化状に腐蝕した柱の残痕がみられている。柱穴の間隔は東西2.1m、南北は南より1.5m、1.5m、2.1m、2.1m、1.5mとなり、その南側には0.9m間隔をおいて浅い竪穴住居址状の掘りこみが付いている。その構造から建物址Ⅰの玄関とみる配置にある。

②は東西3.1m、南北2.5mの柱穴間隔をもち、南東側に0.9m×0.9mの方形の上部には頗るな焼土があり、廻炉裏とみるものがある。それを支えて構築したと思われる四隅と中央部に柱穴が掘りこまれている。この周辺よりの遺物出土は多くみられた。

③は南北2.5m×東西1.8mと1.2mの柱穴間隔をもち、さらに東側に1.2m間隔をもつ出入口とみるが付く。また中心部より南に寄って65cm×60cm、深さ25cmの隅丸方形の掘りこみがあり、その内部上層に5つの石を置き、焼土が全面にみられた。炉址とも・土坑ともみられる形態をなすもので、遺物はなく、建物址に付くものか、その性格は把握できなかった。

建物址Ⅱ(図11)は、①東西2間×南北7間、②東西3間×南北2間の建物となる。柱穴はいずれも小さく径20~30cmの円形、深さ15~30cm、底部が広くなっている袋状をなすものが多く、柱穴の周囲を石詰め、

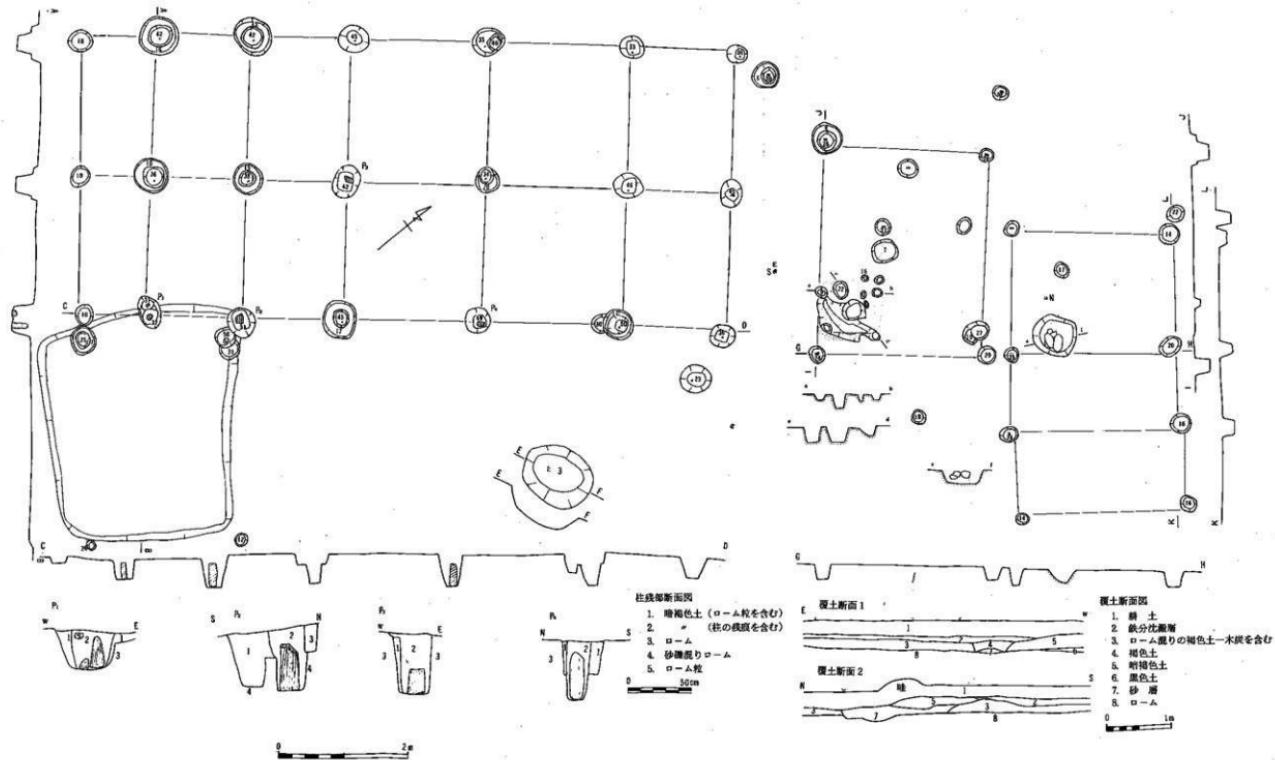


図10 内御堂屋敷跡 建物址 I, 土坑 3号

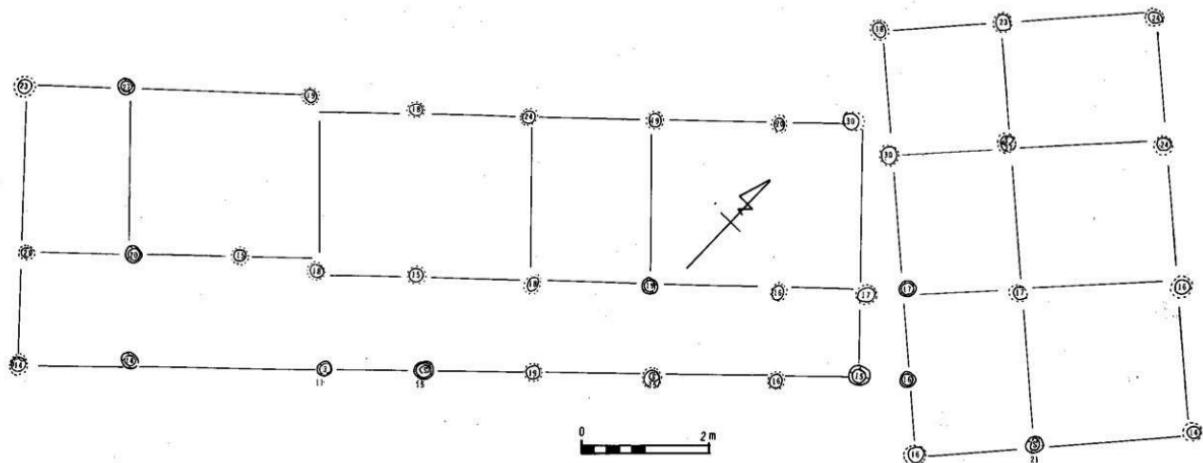


図11 内御堂屋敷跡 - 建物址 II

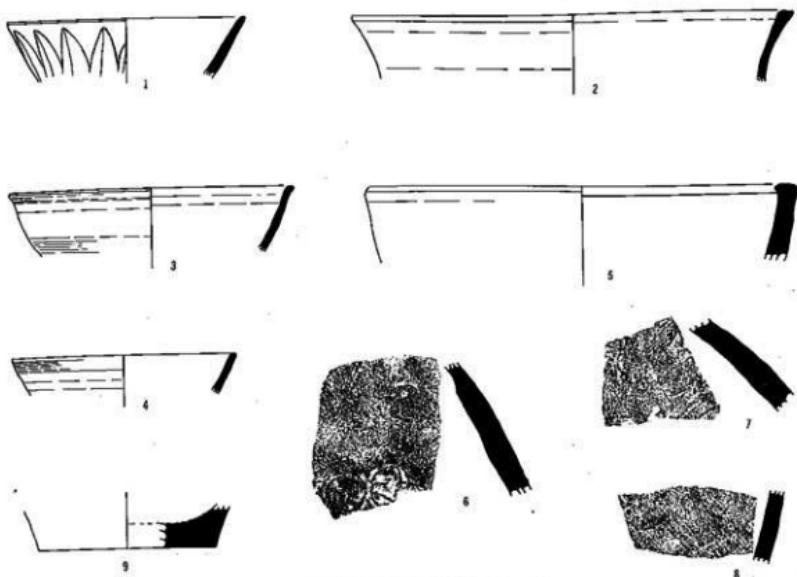


図12 内御堂屋敷跡出土遺物 (1 : 3)

またロームで堅めたとみるものである。

①の東側の東西柱列間隔は1.4m(約5尺)で通路をなすとみられ。西側柱列の東西間隔は2.7m(9尺)で、南北柱列間隔をみると1.8m+1.3m(10尺)となるが3か所あり他は1.8m(1間)となる。この構造からみて馬屋とみられるものであり、2乃至3頭の馬が飼われていたものとみられる。

②は南北柱穴間隔は東から2.7m(1.5間)・2.2m(7尺)・1.8m(1間)となるものとみるが、柱穴間のくずれがみられる。馬屋に付属する建物址であり、下級武士または馬番の住居の場とみたい。

遺物(図12)には青磁・天目茶碗・山茶碗・常滑・古瀬戸等の破片は多い。図示したものに1は青磁輪花碗で良質のものであり、図版にみると輪花碗が多く、図版右端上は乳白色に近い色で口縁部に太い沈線をめぐらすものもある。山茶碗には2のコネ鉢とみる大型のもの、3の碗があり、その他図版にみると破片は多く、2は量投産、3は美濃産である。4は灰釉陶器の碗で僅かに釉はみられる終末期のものである。5は土綱とみられるもので内面に炭化物の付着が多く、須賀賀の焼きである。6~8は常滑の壺片で6にみる押印文様は常滑3様式にみるものである。9は凝灰岩製で表面は磨かれた石製の壺ともみられるがはっきりしない。

遺物の年代は、青磁の大半を占める輪花碗は南宗竈窯で14世紀のものである。乳白色に近い薄色の青磁碗は12世紀末からみられるものである。山茶碗・常滑壺片は鎌倉時代後半から室町時代にわたる13世紀後半から14世紀のものである。これ等の他に天目茶碗・古瀬戸の小片があり、時代を知るには不十分なものである。

IV ま と め

1. 内御堂遺跡の本次調査は、遺跡の北東端部であり、西側には遺跡を東西に切る塩沢の侵蝕谷が南にえぐりこんでいる。この侵蝕は近代になって進行したもので、かつては浅い谷であったと古者は語っている。遺跡の西側は近世初頭の知久平城跡があり、ここよりは縄文期の石器の出土をみている。城跡は宅地化、畑の耕作によって崩された面も多いが、城跡のおもかけを十分に知ることのできるものである。城跡の本丸の地域は鎌倉時代後半より竜東一円を支配した伴野庄地頭知久氏の館址とみられている。

調査結果によれば遺跡の南から東にかけてとりまく湿地帯を避けた西から北の台地縁部に遺跡は立地している。

2. 発見された住居址は 縄文前期・古墳時代後期・律令期の各1軒であり、縄文前期以外の住居址は土石流氾濫によって荒らされて全容を知ることはできなかった。縄文前期住居址は火災の住居址であったが出土遺物は少なく、粘土質の土層よりの出土で土器は器肌は荒れ文様は不鮮明であるがオセンペイ土器を伴っていること、黒曜石製の剥片石器と黒曜石の破片が多く出土をみており、前期中葉に位置づくものとも思われるが、はっきりしない。

3. 本次調査の中心をなすは中世遺構の屋敷跡である。その主体をなす建物址よりの柱穴よりヒノキの割柱が4こ発見され注目される。出土遺物は12世紀から14世紀の青磁・山茶碗・常滑等の破片が検出され、伴野庄地頭として竜東一円に勢力をはった知久氏の有力武将の屋敷跡とみる。知久氏は鎌倉時代上伊那郡箕輪町より知久平に移り、館を構え、戦国動乱期にはいって神ノ峰城を築き柏原に本拠を移している。

神ノ峰築城後も「諏訪上社神使御頭日記」にみられるように知久平は知久本郷と呼ばれている。これは知久氏の本拠が知久平にあったことを示すものである。知久館の位置については、近世に入って徳川家康の伊那郡司管沼氏によって知久平城が築城され、その後完成をみずに飯田へ移っているが、その本丸が90m平方であり、中世館の規模にあっておりここに館が構えられたとみられているが、妥当と思われる。屋敷跡出土遺物の年代が鎌倉時代後半から室町時代前半のものであり館構築の時期に一致し、室町時代後半の遺物はなく、知久氏が神ノ峰城築城後柏原の地へ移るとともに屋敷跡の有力家臣の居も移ったものと推定される。

屋敷跡の発見は飯田地方の中世知久氏を知る資料の一つとして重要な意義をもつものと思われる。

おわりに 発掘作業にあたられた方々の献身的なお骨折りと、飯田市農林課、工事を請負われた平和工業・長谷部開発・仲田工務所の御理解・ご協力のあったことを深謝したい。

(佐藤 道信)

1. 内御堂遺跡埋蔵文化財発掘調査委員会

勝野好一	飯田市教育委員会委員長
沢柳俊夫	飯田市教育委員
大田中一郎	"
松島勝郎	"
林研二	飯田市教育長
山下舜平	飯田市教育委員会事務局社会教育課長

2. 調査団

團長 佐藤 駿信

3. 事務局

飯田市教育委員会社会教育課

山下舜平	社会教育課長
竹村宗丘	課長補佐・文化係長
代田一行	主事
熊谷理恵子	"

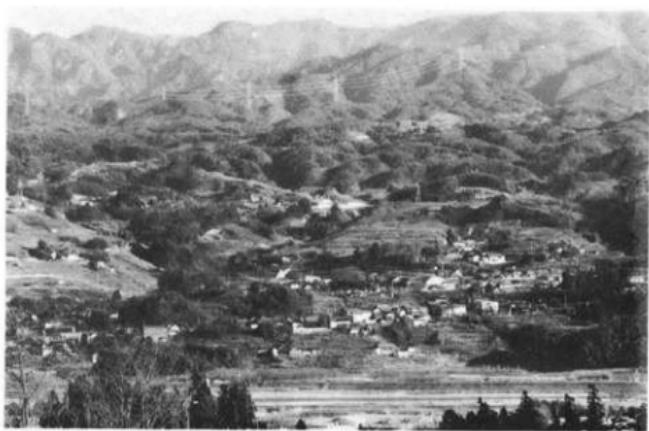
農業構造改善事業担当

相津実	農林課課長
太田茂晴	" 係長
竹村新平	" 技師
藤本照之	" "

4. 作業員

福島明夫	北村重実
藤本徳夫	中平兼茂
牧内住子	佐藤いなゑ
田口さなゑ	

図版 I 遺 跡



天竜川西岸 — 松尾城跡よりみた遺跡(矢印)



東北東よりみた遺跡全景



遺跡近景
— 東より



工事進行の遺跡
— 東より



遺跡より見た天竜川対岸
— 左上は風越山

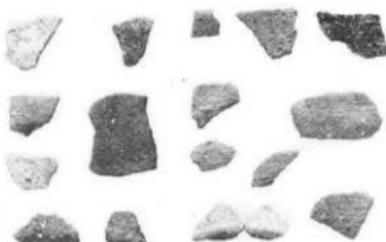
図版 II 遺構と遺物



2号住居址 — 上部の火災を示す炭化物



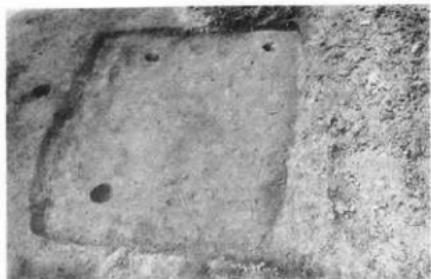
2号住居址



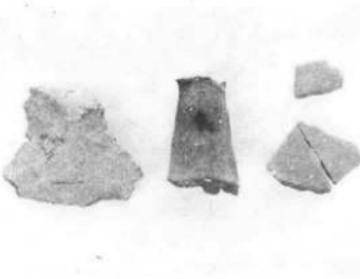
2号住居址の石器

2号住居址の土器

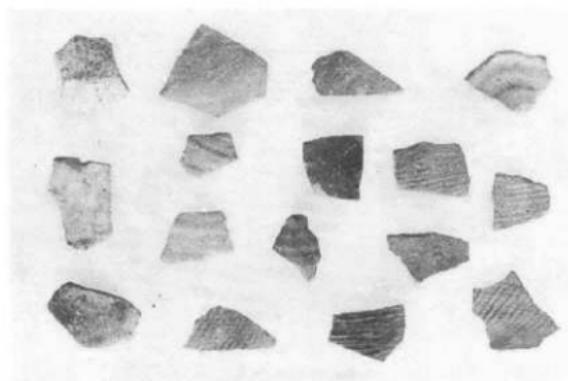




1号住居址 — 右側は土石流の疊層となっ
て荒れている。



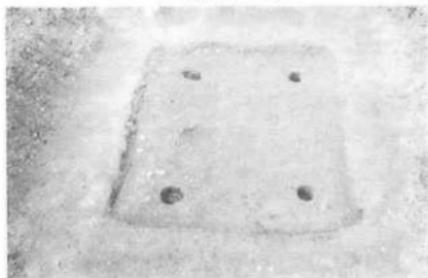
1号住居址出土遺物
(左側の石器は弥生時代の混入品)



2号住居址出土土器

2号住居址 — 左側は土石流の疊層で
荒れている。

土塙1号(上)・土塙2号(下)



屋敷址 一
建物址 I (南より)



屋敷址 一
建物址 I (北より)



屋敷址 一
建物址 II (南より)

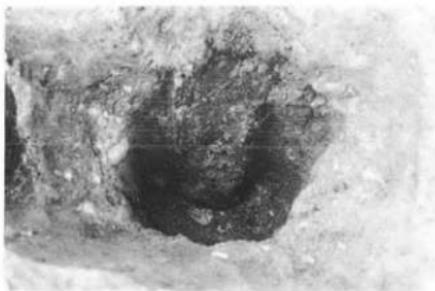




屋敷址 — 建物址 I の覆土断面



屋敷址 — 建物址 I の柱穴内の柱残部

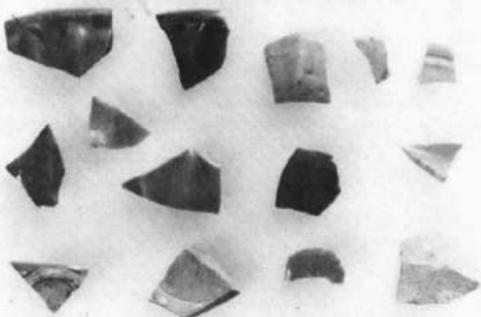


屋敷址 — 建物址 I の柱穴内の柱残部

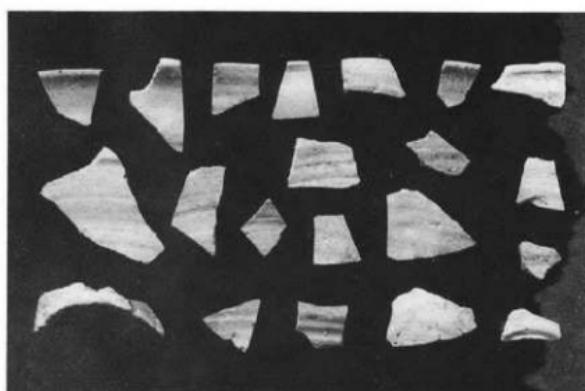
屋敷址 — 建物址 I の柱残部
(左は断面長方形、右は正方形)



屋敷址出土青磁片
(左上と中は古いものとみられる)



屋敷址出土山茶碗片
(左下は凝灰岩製の壺底部?)



屋敷址出土常滑窑片他陶器片



図版Ⅲ
発掘スナップ



土坑1・2号の調査と
上段水田のグリッド調査
ここより屋敷址が検出される。



屋敷址建物Iの検出作業



屋敷址建物Iの柱穴の調査

